

中国での出会い

アジア文化学科4年 古田 美穂子

2007年、私はご縁あって中国の北京語言大学へ留学させていただくことができました。その1年前に天津の南開大学への研修に参加していた私は、中国の魅力にどっぷりつかり、1ヶ月だけではやはり足りない、もっと中国語を完璧にしたい、と中国への留学を決心しました。今、日本の中で中国の印象は悪いものが多いかと思われそうですが、私の北京での日々は、毎日が充実した、とても楽しいものでした。

北京に着いたばかりだったころ、私の中国語のレベルはとても低いものでした。頑張っても辞書を片手に喋ってみても発音が悪く通じないことも多々ありました。開講当初仲良くなったクラスの友達はインドネシアの華僑の子たちで、中国語のレベルがとても高く、言葉が通じないことが何度もあり、一緒に遊びにでて、はぐれてしまい迷惑をかけたときなど、このまま一緒に遊んでいていいのかな。迷惑をかけてばかりだ。と落ち込んだりもしました。しかし、だからこそ、友達に迷惑をかけたくない、という思いが強く、懸命に中国語の勉強に取り組みました。半年もした頃には友達と会話することにも問題はなくなって、「前は中国語が喋れないのに迷子になったりして大変だったのにね。」と冗談でいわれるほどになっていました。言葉はあくまで手段ですが、勉強すればするほど、だんだんと通じるように、また相手が言っていることがわかるようになることが単純に嬉しかったのを覚えています。

また、私が学習したクラスは、クラス全員がほぼ毎日顔を合わせるようなクラスで、アジアから欧米までさまざまな国籍の人たちがいるにもかかわらず、クラス全員がとても仲がよく、困ったことがあればすぐに助け合う和気藹々としたとても雰囲気の良いクラスでした。クラスメートの誰かが誕生日を迎えるたびに、誰かが指揮を取ってパーティーをひらき、みんなで祝っていました。半年でクラス入れ替えだったのですが、一番最初のクラスだったメンバーは離れてからも仲がよく、最後にみんなで一緒にハルピンへ旅行にも行きました。人数がとても多くまとまって行動することは大変でしたが、夜行列車でいく道中から、初めて見る氷灯や、雪の彫刻、そして何より初めて体験するマイナス30度の世界、ホテルでの夜、全てが楽しくあっという間に過ぎていきました。みんなが一人ずつ帰国していくときはとても寂しく、みんなで空港まで見送っては毎日のように涙を流していました。それだけ別れを惜しめる相手に出会えたということは、私の人生の宝であり、誇りです。

北京での出会いは、外国人の方にしる、日本人の方にしる、ましてや筑女の人でさえ、北京で助け合って生活したことで新しい発見もあり、どの出会いも私を大きく成長させてくれました。中国に留学したという大変だったでしょう、とか、つらいことはなかったの、という言葉はいただきますが、私自身は周りの方に助けていただいたことばかりで、大変だったという思いはあまりありません。本当にこの出会いに感謝し、嬉しく思っています。